

Title	伝達におけるis-ought転換：誘導された変異としての規範バイアス
Sub Title	
Author	柿沼, 舞花(Kakinuma, Maika)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.98 (2024.) ,p.103- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2023年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000098-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

伝達における is-ought 転換： 誘導された変異としての規範バイアス

柿沼舞花

1. 導入

1.1. 規範と機能

私たちは、「自然界は弱肉強食であるから、人間も弱肉強食であるべきだ」といった、である (is) からであるべき (ought) という論理的に飛躍した推論を簡単にする傾向がある。これはヒュームの法則と呼ばれ、17世紀から哲学者らの間で議論されてきた (Hume, 1740/2000)。「である」という存在命題から、「であるべき」という価値命題を見出すのはなぜだろうか。情報を「であるべき」というように修正を加え、他者に伝達することにはどのような機能が考えられるだろうか。

「であるべき」といった価値命題、つまり規範は、ある行為をする／しないについての自他を含んだ公的な誓約である (Shank et al., 2018)。機能的観点から、私たち人間は相互依存的であり、集団に依存してきたため (Tomasello, 2016)、集団の結束をつくり維持する規範の創造や伝達は、人間の生存や繁殖において利点があったと考えられる。

1.2. 誘導された変異

規範とは、義務・許可・禁止に関する他者との共通理解 (Crawford & Ostrom, 1995) である。規範は集団の結束や維持に貢献すると考えられるが、実際に Shank et al. (2018) は、集団の利害が関わる繰り返しの公共財ゲームを用いて、定期的な規範の伝達が協力の維持に寄与することを実証した。このように、規範の伝達が集団内協力の維持という利点をもつなら、規範は他の中立的な情報より優先して伝達される可能性がある。Kakinuma et al. (2023) は、他者に伝達する社会的情報 (他者との相互作用に関する情報) のうち、規範はほかの社会的情報と比較して優先的に伝達されることを実証し、この傾向を規範バイアスと呼んだ。これは、情報そのものの魅力が人々の関心や、記憶に残る程度、伝達に影響を及ぼす傾向を指す内容バイアス (Boyd & Richerson, 1985; Richerson & Boyd, 2004) の一つである。内容バイアスは、情報が伝達過程で忠実に伝達される傾向を指すが、一方で、情報は伝達の過程で大部分がもとの情報とは異なるものとして、修正されて伝達されることが多い (Miton, 2022)。これを、誘導された変異 (guided variation) という (Mesoudi, 2011)。

1.3. 仮説

Kakinuma et al. (2023) は、規範を忠実に伝達する内容バイアスの研究である一方で、本研究は中立的な情報が規範に修正される誘導された変異を扱った研究である。本研究は規範を含まない情報 (is) が、規範を含む情報 (ought) に変容する傾向について、実験によって定量的に検討した。Kakinuma et al. (2023) によれば、情報伝達過程 (受容, 記憶想起, 伝達段階; Eriksson & Coultas, 2014) で、規範バイアスは情報を記憶する過程である記憶想起段階ではなく、情報を他者に伝達する過程である伝達段階で顕著であった。規範は覚えているだけでは機能せず、伝達されることで機能することは、Shank

et al. (2018) の実験で確認済みである。これらの結果に従えば、規範は伝達されることで協力を効果的に維持する機能をもつことから、規範バイアスは記銘想起段階ではなく、伝達段階で生じると考えられる。規範バイアスが誘導された変異においても適用されるとすると、中立的な情報は、伝達段階で規範的情報として修正されやすい (ought への修正が生じる) 可能性があると考えられる。

2. 方法

2.1. 参加者

225 人が Lancers (クラウドソーシングサービス) で募集され、Qualtrics によるオンラインの質問紙に回答した。回答時間が 300 秒以下の参加者を除外した結果、最終的に 204 人 (男性 = 134 人, 女性 = 70 人, $M_{\text{age}} = 42.14$, $SD = 9.56$) が分析対象とされた。

2.2. 実験素材

実験者が作成した架空の物語 4 つを使用した (付録 6.1)。物語はすべて規範に関する情報 (「であるべき」など) を含まず、「である」という事実を表す言葉のみで作成された。質問項目は、1 つの物語につき 8 項目ずつ作成した (付録 6.2)。

2.3. 手続

参加者は物語 A~D すべてを読み、それぞれの質問に回答した (参加者内デザイン)。参加者は物語について最初から最後まで一度だけ読み、質問項目の文章について「先ほど読んだ物語の内容にどの程度含まれていると思うか」を 7 段階で評価した (記銘想起段階)。さらに、先ほど読んだ物語を再度提示し、何度でも参照できる形で、記銘想起段階と全く同じ質問項目を提示し、それについて「質問項目の内容について他者に伝達する場合、それぞれどの程度他者に伝達すると思うか」を 7 段階で評価した (伝達段階)。物語の提示順序と質問項目の提示順序はランダム化された。

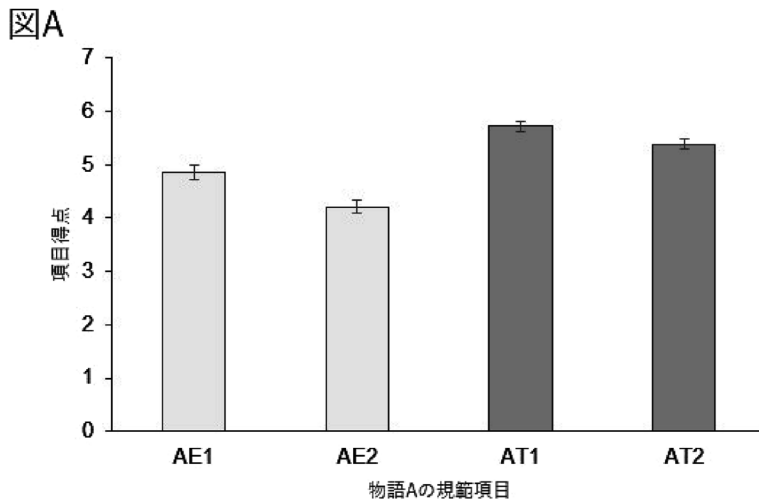
2.4. 分析

8 つの質問項目のうち、2 つは、「~べき」や「~するほうがよい」といった規範に関する言葉を含んだ (規範項目)。記銘想起段階で回答された規範項目の平均得点と、伝達段階で回答された規範項目の平均得点を比較した。

3. 結果

JASP による反復測定 ANOVA により、物語ごとに記銘想起段階と伝達段階の規範項目の平均点を比較した。

物語 A では、記銘想起段階の 2 つの規範項目の得点と、伝達段階の 2 つの規範項目の得点には有意な差があった ($F(3, 609) = 58.90$, $p < .001$, $\eta^2 = .23$)。ボンフェローニ補正により、記銘想起段階の規範項目 1 ($M_{\text{AE1}} = 4.86$, $SE = 0.13$) は、伝達段階の規範項目 1 ($M_{\text{AT1}} = 5.71$, $SE = 0.10$) より有意に低く、記銘想起段階の規範項目 2 ($M_{\text{AE2}} = 4.21$, $SE = 0.13$) も、伝達段階の規範項目 2 ($M_{\text{AT2}} = 5.38$, $SE = 0.10$) より有意に低いことが示された (図 A)。なお、物語 B~D においても A と同様の結果が得られたが、詳細は紙幅の関係上割愛する。



注) 図AのAE1は物語Aの記銘想起段階 (Encode and retrieve phase) の1つめの規範項目を意味し, AT1は物語Aの伝達段階 (Transmit phase) の1つめの規範項目を意味する。

注) エラーバーは標準誤差を表す。

4. 考察

実験で使用した4つの物語すべてにおいて, 記銘想起段階の規範項目より, 伝達段階の規範項目の得点のほうが高い結果となり, 伝達段階において, よりヒュームの法則が生じやすいことが示された。つまり, 規範バイアスが, 情報を忠実に伝達する内容バイアスのみならず, 情報が修正される過程である誘導された変異においても確認された。

規範を忠実に伝達することは, 規範逸脱の防止に寄与し, ひいては規範を共有する他者や集団内の協力関係を維持する機能をもつだろう。しかし, 中立的な情報 (is) が規範的な情報 (ought) へと修正されるのはどういった機能をもつのかはわかっていない。規範への修正は, 過剰な規範の検出あるいは過剰な創作ともいえ, これが機能か副産物かは議論の余地がある。

本研究では物語を用いたが, ほかにもうわさやデマ, 陰謀論等の研究へと拡張させることが可能であり, 今後の研究が待たれる。

謝辞

本研究を遂行するにあたり, 安藤寿康先生, 中分遥先生にご指導を賜りました。ここに, 厚く御礼申し上げます。

参考文献

- Boyd, R., & Richerson, P. J. (1985). *Culture and the evolutionary process*. University of Chicago Press.
- Crawford, S. E. S., & Ostrom, E. (1995). A Grammar of institution. *American Political Science Review*, 89(3), 582-600. <https://doi.org/10.2307/2082975>
- Eriksson, K., & Coultas, J. C. (2014). Corpses, maggots, poodles and rats: Emotional selection operating in three phases of cultural transmission of urban legends. *Journal of Cognition and Culture*, 14(1-2), 1-26. <https://doi.org/10.1163/15685373-12342107>

- Hume, D. (2000). *A treatise of human nature*. In D. F. Norton & M. J. Norton (Eds.), Oxford University Press. (Original work published 1740)
- Kakinuma, M., Ando, J., & Nakawake, Y. (2023). Preference for normative information over social information: A vignette experiment testing content bias at three phases of transmission. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 14(2), 53–57. <https://doi.org/10.5178/lebs.2023.110>
- Mesoudi, A. (2011). *How Darwinian theory can explain human culture and synthesize the social sciences*. University of Chicago Press. <http://dx.doi.org/10.7208/chicago/9780226520452.001.0001>
- Miton, H. (2023). Cultural attraction. In J. J. Tehrani, J. Kendal, & R. Kendal (Eds.), *The Oxford handbook of cultural evolution*. Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780198869252.013.4>
- Richerson, P. J., & Boyd, R. (2004). *Not by genes alone: How culture transformed human evolution*. University of Chicago Press. <https://doi.org/10.7208/chicago/9780226712130.001.0001>
- Shank, D. B., Kashima, Y., Peters, K., Li, Y., Robins, G., & Kirley, M. (2018). Norm talk and human cooperation: Can we talk ourselves into cooperation? *Journal of Personality and Social Psychology*, 117(1), 99–123. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1037/pspi0000163>
- Tomasello, M. (2016). *A natural history of human morality*. Harvard University Press.

5. 付録

紙幅の都合上、物語 A とその質問項目のみ掲載する。

5.1. 物語 A

友達から聞いた話です。学校からの帰り道、AさんとBさんは二人で橋の上を歩いていると、後ろから足音が聞こえました。振り向くと、帽子、洋服、靴下、靴まですべて紫色で統一した子どもが立っていました。目が合うと、子どもは「僕のお母さんは、どこ？」と尋ねてきました。Aさんは「そうだな…交番に行ってみたら？」と答えました。Bさんは「わからないなあ」と答えました。すると子どもは何も言わずどこかへ行ってしまうしました。その後、Bさんと別れ、Aさんは家路につきました。そして、自分の住むアパートに到着し、部屋の鍵を開けて中に入りました。電気をつけると、部屋の中にさきほどの子どもが立っていて、じっとこちらを見つめていました。子どもは「交番にはいなかった…嘘つき…」と言ってAさんを家から引きずり出してどこかへ消えてしまいました。翌日から、Aさんが学校に姿を現すことはありませんでした。

5.2. 物語 A の質問項目（規範項目を太字にした）

- 道で紫の子どもに母の行方を尋ねられ、Aさんは交番かなと答えると行方不明になった
- 道で紫の子どもに母の行方を尋ねられ、Bさんはわからないと答えると難を逃れた
- 紫の男の子は嘘つきをどこかへ連れて行った
- 紫の子は嘘をつかなければ何もしなかった
- **紫の子どもに母の行方を尋ねられても「わからない」と答えるべきだ**
- **紫の子どもに母の行方を尋ねられても行き先を答えてはいけない**
- 交番のおまわりさんが子どもに優しく話しかけた
- Aさんは家に帰り、紫の電気をつけた